読書のすすめ

大きな森の小さな家
ワイルダー作

世界傑作童話シリーズ
インガルス一家の物語Ⅰ
小学校中級以上
福音館書店

江波諄子

はじめて、森と湖のある、カナダの大自然に恵まれた山の中で暮らした時、私は、自分がその広大な自然の中に、身も心も吸い込まれていくのを感じた。つい、一ヵ月前までの都会での幾何学的な世界から、ゆるやかで、自然な曲線の世界に移ると、そこには大地に大きく包まれた安ど感と、厳しい自然との戦いがあることを知った。毎日の仕事のひとつひとつが、自然と深くかかわり合い、生きる喜びと苦しみがそこから生ずる。私は、できるだけ大きく目と心を開いて、新鮮な世界を全身に受けとめ、毎晩、ベッドに入る前に、記録ノートにその日のでき事を書き綴った。

「Little House in the Big Wood」は、そのころ、私がすすめられて手にした本である。長い間、アメリカの子どもたちに親しまれてきたその本は、古くて、紙もすでにうす茶色になっていた。そこには、ローラという幼い女の子と、その家族が、森の中で力強く生きていく姿が大変重みをもって描かれていた。

昨年の夏、この本が「大きな森の小さな家」という題で日本語に訳されて出版されたので、さっそく読み返してみた。アメリカでは、ちょうど、その一年前に、この物語の作者、ローラ・インガルス・ワイルダーの作品が再販され、再びすぐれた作品として、紙上にとりあげられていた。ワイルダー夫人は、自身の生涯記ともいうべきものを、「大きな森の小さな家」をはじめとして、いくつも書き残した。このようにフレッシュな生活記録を、彼女が六十四歳になってから書き始めたということは、驚くばかりである。さし絵は、「おやすみなさいフランシス」や「白いうさぎと黒いうさぎ」でおなじみの、あのガース・ウイリアムズが、丹精をこめて描き、暖かく、まる味をもったさし絵は、物語の内容を十二分に表現している。

生き生きとした生活とは、普段私が考えているより、もっと重いものであるようだ。それは本当に人間の基本的な生活ばかりであるけれど、ひとつ、ひとつが生きている。生活のひとこま、ひとこまに生きることへの基本的な苦しみと喜びが織り混じっている。高度に文明が進んで、何年も経ってからこの世に生まれてくると、世界はあまりに細分化されすぎていて、簡単で、初歩的な人間の基本的生活の形態など、とうていつかめなくなってしまう。生きるということが、どんなに厳しく、神聖で、味わい深いものであるか、ワイルダー夫人が示している。どこもかしこも人の手の入った国で、自然を探そうなどというキャッチフレーズに触れながら暮らしていると、自然は何か、優雅で、やさしく、上品で、甘く、せつなく、ロマンティックにも思えるけれど、Wildな自然は、もっと厳しく、戦わねばならないものなのである。私自身も、カナダの森林地帯に生きる人々の生活に触れ、自然の中で生きる構えをいったんくずし、もう一度つくりなおさねばならなかった。ワイルダー夫人は、また、自分自身でもあるローラという物語中の少女を通して、幼い子どもの世界を、そのとおりに伝えている。プレゼントにお人形をもらって喜ぶありさま、かあさんの台所仕事のまわりでうろつく楽しさ、どうしたらクッキーを公平にわけることができるかを考えたり、「どっちが好き」とたずねる時の子どもの期待と不安に満ちた緊張した気持ちなど、いつの時代でもある、子どものかざらない生活のひとこま、ひとこまを豊かに表現している。こんなに何もない場所と時代に、どんなに豊かに子どもたちが遊んで成長していくかを読むのも楽しい。きっと、それは日本人の古い生活にも通じることであろうし、私たち自身の手で、こうした生活の記録をしっかりと留めておかなければならないと思う。「大きな森の小さな家」は続いて「大草原の小さな家」、「プラム・クリークの土手」(以上既刊)、「シルバー・レイクの岸辺で」、「農場の少年」と読むと、ローラ・インガルス・ワイルダーという女性を通した、ひとつの大きなまとまりをもった膨大な書物として、きっと私たちの心に力強い生命を感じさせてくれると思う。

(十文字学園女子短期大学)